

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第三十四回 宗教の打算性

南出喜久治 (令和8年1月15日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

祭祀を実践しても何らの経済的な効果や利益を齎さないものです。現世利益を求めるものではないからです。命と魂を与へてもらひ感謝する者がお代はりを求めるかのやうにさらに利益を求めるのは厚かましい限りです。だからこそ感謝のための祭祀を実践すること自体に尊い意義があるのです。それが祭祀の本質です。経済的な利益を考へて人々を理性(計算)で誤導する宗教とは違ひます。

喜捨とか、寄進といふ言葉は、経済用語です。見知らぬものからの見返りを期待するために寄進するからです。

宗教では、この宗教を信仰すれば幸せになると説明して信じさせます。しかし、信仰しても不慮の事故などに見舞はれることがあります。さうすると、信仰してゐるのにどうしてそんなことが起こるのかと思つて、そのことを宗教者に告げると、信心したからその程度の被害に留まつたとか、信心が足りないからとか、寄進が足りないから、といふ説明がされます。屁理屈でなんとでも説明ができるのです。

しかし、祭祀で行はれる奉納は、神人共食のためのものなので、見返りなどを求めるためのものではありません。祖先のご加護を求めずとも加護していただくのが祖先であると信じるだけでよいのです。

話は変はりますが、命も惜しまず弱気をたすけ強きを挫く行動原理としての任侠(をとこだて)といふ言葉があり、この任侠の定義はいろいろとありますが、最も膝を打つ任侠道の解釈は、誰もが選ばない最も損をする選択をし続ける克己的、禁欲的な生き様であるとする定義です。

たとへば、電車の中で多数の無頼漢が一人の女性に理不尽な危害を加へてゐたとします。周囲にはそれ以外の者は自分だけしか居ないし、次の停車駅に着くのも相当時間がかかるので次の駅で助けを求めることができないといふ状況であると仮定します。ここでは、その無頼漢たちに立ち向かつてその女性を助けやうとするか、見て見ぬふりをして何もせず

に居るかといふ究極の二者択一の選択に迫られます。前者を選択すれば、多勢に無勢で、わが身に災難が降りかかり大怪我などに見舞はれることは必至です。そして、その女性を救ふこともできない悲惨な結末が待つてゐるかも知れません。このやうな場合、理性的（計算的）に判断すれば、後者を選択するのが当然ですが、任侠道としては、最も損をし、何の役にも立たない前者を選択するといふことになります。

祭祀の実践は、ある意味でこれに似てゐます。経済的利益や見返りを一切期待しないことが祭祀の誇りであるのです。

ともあれ、現代において、極僅かですが、ときには珍しく祭祀を語る者が居たとしても、ただただ、サイシ、サイシと念仏のやうに唱へて自らは実践はしないといふヘタレが多いのです。語らないよりは語る方がマシといふのではなく、そんな者が居ることによつて、祭祀は理念であつて実践ではないといふ誤解を与へてしまふ弊害の方が大きく、祭祀の宗教化といふ弊害の方向に陥るからです。

祭祀の人とは、祭祀を語る人のことではなく、祭祀を日々怠らずに行ふ人のことです。